

東京五輪と若者



むろだて いさお
室館 勲

株式会社潮流社 社長
株式会社キャリアアクションサルテイング
代表取締役社長

五十七年ぶりに東京五輪が開催。オリンピック・パラリンピックが好きな私は連日、どの競技を観ようかと考えるのも楽しいものでした。夜の五輪ハイライトはぜひぶん助かりました。

世界の一流アスリートが集まる五輪には、人生や仕事のヒントが満載です。競技の内容と勝敗、選手が競技に懸けた思いや人柄などが紹介され、勉強になります。私は、日本のお家芸と言われる柔道の選手の立ち居振る舞いに注目していました。二〇一二年のロンドン五輪では、勝利し金メダルを確定させた選手が畳の上で派手なガッツポーズをした姿を見て、正直「格好悪い」と思いました。格闘技は、一歩間違えれば相手を怪我させたり病院送りにしてしまったりする可能性のある、まさに真剣勝負です。試合では闘ってくれる相手がいて初めて試合が成立します。居合道には「残心」という言葉があります。真剣で闘い、もし敵を倒したとして

も、実は相手に余力があり、隙を突いて後ろから切りかかってくるかもしれません。したがって、勝負がついても、相手に背を向けても、決して気を抜かないこと。これを残心と言います。

東京2020五輪での日本の柔道家の多くは、試合に勝利しても笑顔は見せず、畳の上では残心し、一礼をして畳を降りてからやっと、コーチと勝利を分かち合っていました。素晴らしい光景でした。闘ってくれた相手に対して尊敬を表す態度は大変美しいと思います。

世界には様々な格闘技や競技がありますが、試合を終えた後の挨拶が素敵だった競技もあれば、ギスギスした競技もありました。これは全て指導者に原因があると考えます。ランキング一位の国が手本となり、その競技の良い常識を作っているほしいと思います。それが子供たちに対しての良い教育につながると思います。

スポーツから学ぶことは大変多いです。しかし若者に話を聞くと、意外と五輪を観ていないようです。理由は、普段家でテレビを観ないからだそうです。携帯ゲームやYouTubeで時間を潰す若者のなんと多いことかと驚きました。

オリンピック・パラリンピックを始め、大きな世界大会の観戦をお勧めしました。自分の学びとともに、世代を超えた共通言語になるからです。世間の話題をリアルタイムで感じることの重要性に、なるほどと頷いていた若者が印象的でした。